

(再開 午前11時00分)

議長（勝山 正）

休憩前に引き続き会議を開きます。

4番、山本隆樹議員。

(「はい、議長。4番。」の声あり)

(4番 山本隆樹 議員 登壇)

1. 地域公共交通について

4番 山本隆樹 議員

では、通告に基づき2件質問いたします。

1点目、地域公共交通について。

令和8年度当初予算の中で公共交通の委託費が倍増しており、持続可能な交通体系の検討を要求しています。

今、各自治体でも少子高齢化の中、地域公共交通のあり方が問われてきています。

飯山市では、地域住民及び観光客の移動手段の確保と利便性向上を目的とした「いいやま乗り合いタクシー」の実証実験を実施し、令和8年10月からの本格運行が決定しました。

運行地域として飯山市、野沢温泉村、木島平村に設定することとなります。

公共交通は単なる移動インフラではなく、医療、福祉、教育、地域経済を支える生活基準です。

木島平の「ふう太号」は中山間地域に対応した交通モデルの一例として理解しています。

そこで質問いたします。

木島平村の地域公共交通であるデマンド交通「ふう太号」及びシャトル便の現状と課題を伺いたいと思います。

議長（勝山 正）

芳川建設課長。

建設課長（芳川 誠）

それでは、村の地域公共交通の現状について答弁いたします。

デマンド交通「ふう太号」及びシャトル便の運行につきましては、村民の交通手段として重要な役割を果たしています。

デマンド交通は、特に高齢者などの移動が困難な方の通院や買い物など、生活に欠かせない重要な交通サービスとなっています。

また、シャトル便につきましては、朝夕の学生等の通学、通勤での利用、土日祝日には観光客のアクセス手段としての重要な役割を担っています。

村の公共交通として認知度も上がっているため、デマンド交通の7年度利用者は5,263人で、前年対比110%、シャトル便の7年度利用者は5,472人で前年対比122%と年々増加しております。

課題としましては運営コストが上がっている点で、物価上昇に伴う人件費や燃料等の高騰もあり、委託料が増加しています。

運行本数の適正化や運営効率の向上によるコストの圧縮等の検討とその他多様な交通ニーズに応えていくことが課題だというふうに考えております。

議長（勝山 正）

山本議員。

4番 山本隆樹 議員

いろいろな交通配車サービス等でいろんな提案も出てきて、これからの地域交通のあり方っていうのは、これから検討されていくんだと思います。

その中で、2021 年の早稲田大学地域連携ワークショップ提案の中で配車サービスの提案があったんですね。それはどんなことかという、利用希望者と車を所有する人をアプリ上でマッチングし、一般の方の車を交通手段として活用するシステムの提案がありました。

これは前にもちょっと質問した中で、もしかしたら実現できる可能性もあるかなとも思ったんですが、村側の対応としてはどうだったんでしょうか。

自分としても、それ提案の中で感じたことは、当時としては利用者と車を所有する人、当時としてはライドシェアとか白タクの関係があるんですね。

そういう要素の中で、白タク業者としての国への申請とか、配車アプリの導入経費運用についてもかなり課題があって、その実行が困難だったんだなと自分としては理解してるんですがという理解でよろしいでしょうか。

議長（勝山 正）

芳川建設課長。

建設課長（芳川 誠）

早稲田大学の学生によります令和 3 年度にいただいた提案であります、事業的にはライドシェアの事業にプラスしまして、観光客向けのアプリの活用や高齢者向けの電子掲示板の設置によりまして、より利用しやすい公共交通についての提案をいただいております。

ただ、やはりネックになった部分につきましては、今も検討されておりますが、運転手の確保や営業を村で実施するという部分についての提案でありましたので、その部分がネックになりまして、実施には至らなかったのかなというふうに推察しております。

議長（勝山 正）

山本議員。

4 番 山本隆樹 議員

では、冒頭で触れたいいやま相乗りタクシーが今年の 10 月から本格運行します。

いいやま乗り合いタクシーの概要はどういう概要なのか説明いただきたい。

また、木島平村デマンド交通「ふう太号」との兼ね合いはどうか、併せてお願いしたいと思います。

議長（勝山 正）

次の質問でよろしいですか。2 番目の質問ということで。

4 番 山本隆樹 議員

はい。

議長（勝山 正）

芳川建設課長。

建設課長（芳川 誠）

飯山市は、高齢者等交通弱者の移動の自由確保と経済負担軽減、観光二次交通、交通空白地における効率的な運行等を目的にいいやま相乗りタクシー事業を実施します。

従来のタクシーとは異なり、複数の利用者が同じ車両に乗り合う形態の交通サービスであります。一般市民の利用者は、乗り合いが発生すると人数や距離など条件によりますが、20%から30%の割引になるため、交通費の軽減につながります。

また、実施エリアとして木島平村の7か所も目的地となっております。

議員のおっしゃったとおり、昨年の実証実験を行いまして、本格稼働は今年度10月からということという予定になっております。

こちらのいいやま相乗りタクシーはあくまでもタクシーでありまして、村のデマンド交通との兼ね合いは特にございませぬ。

議長（勝山 正）

山本議員。

4番 山本隆樹 議員

運行地域の中で木島平の乗降車の場所というのは決まっているんでしょうか。

議長（勝山 正）

芳川建設課長。

建設課長（芳川 誠）

目的地につきましては、木島平村で7か所。木島平クリニック、木島平診療所、農林高校、道の駅ファームス木島平、木島平観光交流センター、The きじまスノーパーク、スノーリゾートロマンスの神様の7か所が目的地となっております。

議長（勝山 正）

山本議員。

4番 山本隆樹 議員

その決められた乗降地以外、自宅とか近所のところから呼べるってことはできないでしょうか。

議長（勝山 正）

芳川建設課長。

建設課長（芳川 誠）

こちらにつきましてはあくまでも、飯山の新しい交通でありまして、木島平村の方が利用する場合には、目的地から設定されている目的地までは利用できますが、自宅からということとはできないようになっております。

4番 山本隆樹 議員

乗降地は先ほど言った7か所からということで指定されているということですね。

では、その料金体系は今、乗り合いの人数によって計算、タクシーですので、その割合によっては20%から30%、1人だったら全額負担という形だと思います。

飯山市は高齢者等の特定市民にそういう割引制度っていうのは設けていますが、木島平は利用した高齢者等障がい者等、デマンドでもあれなんですけど、ちょうどこの時間がぴったり合った時に、これを利用した時に、木島平村としての対応は、割引制度っていうのは設ける予定っていうのはあるんでしょうか。

議長（勝山 正）

芳川建設課長。

建設課長（芳川 誠）

まず、飯山市が主体のものでありますので、今のところ、そういうことについては10月からの稼働ということもありまして、今のところは予定はしておりません。

議長（勝山 正）

山本議員。

4番 山本隆樹 議員

状況によっては検討していく可能性もあるということで理解してよろしいですか。

議長（勝山 正）

日碁村長。

村長（日碁正博）

今言いましたとおり、あくまでも飯山市の事業でありますので、村としてそれに逆に飯山市の方からそういう要望があればあれですが、村の方からそういう助成とか、そういうことはちょっと考えられないかなというふうに思います。

あくまで飯山市民の皆さんの利用を前提とした、そこにたまたま行き先が一緒とか、そういう制度でありますので、現時点そういったことは考えていませんのでよろしくお願いします。

議長（勝山 正）

山本議員。

4番 山本隆樹 議員

先ほど当初冒頭で話したんですが、当初予算の中で公共交通の委託費が倍増しており、持続可能な交通体系の検討を要求しています。

その村の対応として、運行委託費の増加は財政上大きな課題とし、ドライバー、車両を効率よく活用するため、総合的な交通体系について関係団体と協議を含めて検討を進めるとしています。

その中で今言われたように、各自治体でもいろんな形で、こういう飯山市との連携とかありまして、各自治体との連携を含めた対応もこれから交通体系に求められてくるのではないかなというふうに思います。

今後の進め方というのはどういうふうに捉えられているか、具体案があるのかをお聞きしたい。

議長（勝山 正）

芳川建設課長。

建設課長（芳川 誠）

今後の進め方ということですが、まず既存の交通のデマンド交通、シャトル便等の利用が増加している部分の検証を行うとともにですね、近隣市町村との連携や新たな移動手段でありますライドシェアや相乗りタクシーにつきまして、村の公共交通会議の関係団体と引き続き協議の検討を続けていきたいというふうに考えております。

議長（勝山 正）

山本議員。

2. 「住みたい田舎」更なる取組を

4 番 山本隆樹 議員

では、2 番目の「住みたい田舎」更なる取組をということで質問いたします。

宝島社発行の雑誌「田舎暮らしの本」の中の住みたい田舎ベストランキングで、木島平村は常に村の部門として上位にランクされ続けています。

村長のコメントでも、「奥山から流れる出る清らかな水と四季折々の農村風景、そこで生まれる米や野菜など美味しい食が自慢」と述べられ、観光振興局長からも「木島平村は奇跡の村です」との魅力が語られました。

選ばれる村として、関係人口を含めた村を支える仲間を増やしていく視点、また受け入れ側の対応として弾みをつけようではありませんか。

そこで質問します。

耕作放棄地を活用した田畑のオーナー制度で成功している自治体もかなりあります。

村としての取組、または課題はどうでしょうか。

伺いたいと思います。

議長（勝山 正）

本山産業課長。

産業課長（本山 等）

村の豊かな自然環境や農村文化、農作物は地域資源であり、都市部の皆さんに農業体験などをはじめとした交流機会を提供することは、関係人口の創出につながる有効な取組であると考えております。

現在、村では市民農園として畑と水田を開設しておりますが、利用状況には大きな違いがあります。

水田については、利用者の皆さんに田植えと稲刈り、夏場の草刈りに参加いただき、日常的な管理は村が担うという仕組みとしていることから、村から遠方の方でも参加しやすく、今年は関東圏を中心に 22 組の方に申し込みをいただいております。

一方、畑につきましては作物の管理や圃場の草刈りなど、利用者による日常的な維持管理が必要でありますので、遠方の方にとってはメリットが少ない状況です。

このため、利用件数は低調で、今年の畑の利用組数は 2 組でありまして、利用拡大が課題となっております。

耕作放棄地を活用してはどうかとご提案をいただきましたが、村の耕作放棄地は畑地が中心となっております。

市民農園の畑地は、先ほど申し上げたとおり、利用者自身による草刈りや獣害対策など継続的な管理が必要となります。

こうしたことから、耕作放棄地の畑地を活用したオーナー制度については、大きな効果を期待することは難しいのではないかと考えております。

しかしながら、農業体験や農村交流への関心は高まっておりますので、今後は既存の水田オーナー制度の拡充など、本村の実情に合った形で関係人口の拡大につながる取組を研究してまいりたいと考えています。

議長（勝山 正）

山本議員。

4 番 山本隆樹 議員

以前でも荒廃地での活用ということで、パブリックコメントでも寄せられていたんですが、山菜の畑作りというような形で一回質問したことがあります。

その時に村長の答弁として当時農業委員もやっておられた時、山菜、ワラビを中心に植え、荒廃対策に取り組んだが、管理の継続等課題があり途中で挫折してしまい、継続的な対策が難しいということで断念したというふうに聞きました。

今現在、食糧危機等を叫ばれている中で、今日、農業面だけでなく、観光、健康、教育面で捉え、都会の小中学校とかいろんな形で木島平に連れて来て、木島平モデルが一つ荒廃地を利用した山菜の栽培等の山菜の畑作りというのは、現実、木島平モデルとしてできるのではないかなと思うんですが、いかがでしょうか。

議長（勝山 正）

本山産業課長。

産業課長（本山 等）

山菜を栽培してはどうかということでもあります。

山菜ということで、収穫時期のご利用はかなりあるかと期待できるかと思えますけれども、それ以降の管理等が必要になりますので、その部分の管理を誰がどうするのかといったところの課題の整理が必要かと思っております。

ご質問の趣旨のオーナー制度につきましては、先ほど申し上げたとおり、本村の場合には遠方の方の利用のメリットが見いだせない部分もありますので、畑の耕作放棄地の活用については難しいのではないかと考えています。

議長（勝山 正）

山本議員。

4 番 山本隆樹 議員

普通の畑よりは山菜の管理っていうのは、まあまだなんとかやっていけるのではないかなと思うのと、自然の学び、村に誇れる地域文化があったり、村のふるさと遺産と水源と、いろんな形で村との交流の中で、そういう1つの畑というか、山菜の畑作りっていうのは、今言ったように、荒廃地対策での採算性とか、継続的な不安の中を解消できる以上のものが価値をもたらすような形で、木島平モデルができるのではないかなと常に思っているんですが無理でしょうかね。

伺いたいと思います。

議長（勝山 正）

本山産業課長。

産業課長（本山 等）

現状は難しいところがあるかなと思っております。1番は管理面になろうかと思います。

そういった課題、どのように解消していけばいいのかといったところを今後研究とかしてまいりたいと思います。

議長（勝山 正）

山本議員。

4 番 山本隆樹 議員

2 番目のテレワーク、ワーケーションで成功している自治体もあって、ここも前に早稲田大学からもワーケーション、こんなことしたらいいんじゃないのみたいな形で提案もありました。

現状のテレワーク、ワーケーションでの今の村の現状と課題をお聞きしたいと思います。

議長（勝山 正）

湯本産業企画室長。

産業企画室長（湯本幸伸）

ワーケーション、テレワークを活用した取組についてのご提案であります。

移住定住の促進や観光人口の創出策の 1 つとして、こういった取組、大変重要な視点であるというふうに捉えてはいます。

特にコロナ禍以降、テレワークやサテライトオフィスといった取組が進んでいる現状があるかと思っています。

先行してコワーキングスペース等の施設整備を行った自治体の事例がいくつか当然あるわけですが、中には Wi-Fi や事務机、そういったスペースといった器を整備はしましたが、利用者が定着せず、その後の維持管理が財源的な負担になっているケースなども確認をしています。

こういった事業を村で実効性のあるものとするためには、施設を整備するだけ、またそれを管理するだけではなく、都市部の企業やそこにお勤めになる、そのコワーキングスペースを使われる方と地域をビジネスや交流の面で結びつける専門的な民間運営事業者、また、コーディネーター人材の存在が必要不可欠だと考えます。

現在の村におきましては、そういった器もそうですが、専門的な運営主体の確保であるとか、こういった方々、皆さんお車でお越しになるわけではありませんで、村内での二次交通であったり、そういった利便性の確保、こういった面でクリアすべき課題が多くあるというふうに、今村で実情として把握しております。

議員ご提案のとおり、成功している自治体もあるという話でございますので、今後そういった事例を研究しながら、テレワーク、ワーケーションなどをターゲットとして、村として取り組めるものがあるのか、研究をしていきたいと考えています。

議長（勝山 正）

山本議員。

4 番 山本隆樹 議員

前にも質問したときで、ワーケーションのできる宿、体験できる宿、そういうのを村でリスト化して、俺のところの宿は半農半 X というか、半農 IT とかいうんですか、こういう形でうちの田んぼちょっと手伝ってもらったりして、あと半分は IT で仕事をしてくださってという宿にしますとか。

中にはその半趣味半 IT みたいな形で来てもらったら、トレイルだとか健康管理とか趣味のことをやって、あとは IT の方の仕事をするというような形で、ワーケーションのできる宿、それを体験できる宿のリスト化をしたらどうかっていうようなことをちょっと話したことあります。

その時に観光振興局と連携して、そういう 1 つの村のテレワーク・ワーケーションのできる村として、こういう宿があって、こういう農業とマッチングしたり、趣味でトレイルとか健康の関係の中で

できる宿がありますよというような形のなんか取組、観光客もうまく取り込んでね、その1つの体系っていうのはできないんでしょうか。

議長（勝山 正）

湯本産業企画室長。

産業企画室長（湯本幸伸）

観光振興局との連携というお話でございます。

観光振興局、今、議員ご提案のようなワーケーションが受け入れられる宿、これまた議員先ほどお話のとおり、ただ単にネット環境が整っていれば、それでその宿というふうになるわけではないんだろうなというふうに思います。

その宿に滞在しながら、こんな滞在の仕方が受け入れできるよということになるかと思しますので、また観光振興局に議員ご提案について、私たちの方からも振興局へも提案させていただいてというふうに思っておりますので、よろしくお願いします。

議長（勝山 正）

山本議員。

4番 山本隆樹 議員

本当に結構取り合いというか、テレワークやってる人、結構思った以上にリモートで仕事をする人が増えて、あれ、近くの人でも帰ってきて半分はリモートでできるんですっていうような形で滞在していることも、結構、村内の中でも見受けられる機会が増えてきました。

で、本当にこれからの時代の中で、そういう2拠点生活っていうんですか、そういうことが増えて、リモートを活用して、その中での半農とかトレイルだとか健康管理だとか趣味とかいうのをマッチングできる、いいシステムが社会が生んできているのでは。

これからの時代の中で、この村はそういう点ではね、すごく先ほど言ったように住みたい田舎の中の自慢ある村ですので、そういうことをうまくPRしなければいいなというふうに思って、進めていただきたいと思います。

では、3番目の質問に移らせていただきます。

連携協定締結大学として、早稲田大学、國學院大学、東京大学、東京農業大学、ものづくり大学、桐朋学園大学があり、本当に村としては大きな今までの実績があったり、いろんな形と連携している村に育ってきております。

継続して来村してもらえる更なる取組っていうのはどういうふうに捉えられているかお聞きしたい。

議長（勝山 正）

日碁村長。

村長（日碁正博）

ご質問のとおり、いろいろな大学と交流しているわけでありましたが、それぞれの状況、それからまた考え方についてお答えさせていただきます。

まず、最初に早稲田大学との連携事業であります。毎年1月から3月にかけて10名ほどの学生に参加をしていただいて、地域連携ワークショップを行っております。昨年で17年目を迎えます。

令和7年度からは地域活性化起業人の園原氏とともに、課題解決のためのテーマ設定、それからワークショップの伴走支援、提案事業の実現に向けた取組を行っているところであります。

昨年度の参加学生とはチャットツールで連絡を取っているほか、企業人によるオンラインミーティングなどにより、提案事業の具体化に関する相談やイベントの報告等を随時行っております。

直近では、ゴールドデンウィークに昨年度の参加学生2名が友人とともに来村し、道の駅イベントに参加するなど、交流機会ができており、引き続きコミュニケーションを取りながら、継続的に来村機会を創出していきたいというふうに考えております。

それから、國學院大学につきましては、平成26年2月14日に協定をしまして、学生による手作り博物館構想実現のために調査を行ったことが始まりであります。その後、毎年学生達が訪れて、ふるさと資料館構想をまとめました。

残念であります。平成30年の学芸員実習の交流が最後となり、現在は交流事業は途絶えております。

次に東京農業大学であります。関係人口の創出と地域活性化、並びに大学の教育研究の充実に寄与することを目的として、平成26年に東京農業大学と連携協定を締結し、本村の農家において学生の農業研修を受け入れております。

この研修は毎年7月と9月の年2回実施しておりまして、毎年10人前後の学生が来村しております。今年も7月下旬、9月中旬の開催を予定しております。

今後につきましては、地域行事や村民の皆さんとの交流につながる取組に拡大していけるよう、大学側と検討、協議を進めてまいります。

次に東京大学であります。平成26年に東京大学大学院と教育研究交流連携事業を締結いたしました。

その連携事項に沿って、毎年、木島平中学校では8月下旬から9月中旬にかけて3週間、大学院生による教育実習を行っております。

平均すると毎年5名ほどの実習生を受け入れしております。

また、保育園、小中学校では、教育環境の整備や授業づくり、学校づくり等に大学の先生方が毎年数回来村し、保・小・中学校の先生方と共同研修を行っております。また、小学6年生が修学旅行で東京大学を訪問しております。

関係人口の拡大ということですが、東京大学大学院で学ばれた学生や指導員が、その後大学の指導者となり、再び本村を学びのフィールドとして、3大学の先生や学生が訪れております。

具体的には、都留文科大学、文教大学、お茶の水女子大学であります。

それから、桐朋学園であります。平成27年に相互友好協定についての協定を結んでおります。

連携事業として、音楽を通じて文化芸術に関すること、教育及び福祉に関すること、生涯学習に関することとしております。

小学校が統合する平成22年以前まで、毎年、木島平村に来村されて演奏会が行われておりましたが、実施されておませんでした。

その間は、小学6年生が桐朋学園大学を訪問するだけでしたが、昨年、村制施行70周年を機に、再び本村で演奏会を実施することとしております。

次にものづくり大学であります。令和5年に連携協定を締結いたしました。

連携事項は、自然、環境、産業及び地域振興、地球温暖化対策、福祉や子育て、SDGsなどに関することです。

昨年、建築学科の学生が制作した東屋を本村に寄贈していただいております。

小中学校との連携では、ものづくり大学の先生が開発した教材ソフトを利用してプログラミングの教育を行っております。

また、3Dプリンターを活用してプログラミングしたものが形になるという学習を行っております。

以上申し上げた内容の取組を行い、連携交流を進めております。

大学との連携協定による自治体側のメリットとすれば多岐にわたります。

まず、第一に、大学が持つ知識や専門性を活用することができる。

大学側は最新の研究成果を持っております。特定の分野における知識が豊富です。これらを自治体が活用することで、地域の課題解決に向けた新たな視点や解決に向けたヒントを得ることができる。

より効果的な政策立案や施策の実施が可能になるというふうに考えております。

今後とも、大学との連携により、地域の子どもたちの教育面や地域との連携、継続的な交流に活性化につなげていくよう進めてまいりたいというふうに考えております。

議長（勝山 正）

山本議員。

4番 山本隆樹 議員

ぜひ、今までの成果というのは、村で今活躍している人も残ってくれてたり、定期的に訪れてきてくれてたり、こういう連携の締結大学は大きな力を發揮してくれているなというふうに思います。

その中で、今、早稲田大学との地域連携ワークショップで、もう17年続いているんですね。

その中で前も話したんですけど、実行に至った事業、なんとか一緒に1つのモデルを作りたいなとこっちも思っていたんですが、17年やってこれ一緒にやったモデルだよみたいな形が何か作っていきたいというふうに思っているんですが、前にも村長にその答弁を求めた時に、どうしても学生の段階での提案で、実現にはちょっと課題があつて、実行に至っていないというような回答でした。

本当にこれからそういう課題は、先ほど言ったように配車サービスの提案だとかワーケーションの提案も大きなヒントだったんですよ。

そういう中を学生の段階での提案で実現には無理かなというところを、村側、地域おこし協力隊、観光振興局、農業振興公社、そういう連携で何か1つ実現できるモデルを作りたいと私は思っているのですが、そういう取組ってというのは、今後前向きにやっていけないでしょうか。

議長（勝山 正）

湯本総務課長。

総務課長（湯本寿男）

それでは私の方からお答えをいたします。

各種団体との連携によって、こういった学生たちの提案したものを実現していくというお話でございます。

昨年度から、地域活性化起業人制度を活用しまして、過去にこの村に訪れた学生がコーディネーターとなりまして、早稲田大学と連携をしまして、その提案の創設からコーディネートをいただいております。その提案、もしくは村と行き来をする橋渡し役として活躍をしていただいております。

先ほどのお話にもありましたように、ゴールデンウィークにもこちらへ来ていただいて交流をしておりますし、また提案の内容について、これから実現していけるように今検討しているところであります。

ただ、必ず実現するかどうかというのは難しい部分もございますので、こういった地域活性化起業人を活用しながら、村との関係人口につなげていけるように、こちらも一緒に考えていきたいというふうに思っております。

議長（勝山 正）

山本議員。

4番 山本隆樹 議員

本当に地域の課題に関わり、村を良くしたいっていう提案をいただいているわけですね。

その中で木島平村のいいところというのは、農林高校もそういう形で地域の課題を探したり、なんとか1つモデルとして作り上げていけないかなというような形で、農林高校自身もそういう形で頑張っています。

そういう中で、大学提携した学生たちと、村の人たちと、農林高校の形でうまくマッチングして、うまくやっていける村だと思うんですが、そういうところをしっかりと今後、協力し合って、1つ実現していただきたいと思って、今回の質問を終わらせていただきます。

議長（勝山 正）

以上で山本隆樹議員の質問は終わります。

（終了 午前11時42分）

議長（勝山 正）

ここで暫時休憩とします。

開会につきましては、午後1時からということでお願いします。

（終了 午前11時42分）